長洲町立長洲小学校　校長便り　№１１２

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和5年8月31日(木)

雑感

夏休み中もかなりの時間を読書に費やした。就寝前の10分間読書と隙間時間の読書だが、トータル9冊ほど読んでいた。ジャンルも多岐に亘り、読んでいて統一感の無さが自分でも面白く感じる。最近は広く浅くの読書が出来ており、嬉しく思う。

生き方についての本が面白かった。その一説にこうあった。あるフィギュアスケートコーチの言葉だ。

「コーチが今何を考えているかとか、今日は何を練習したらいいかとか、こちらが何も言わなくても察することができる。そういう勘が良い子が伸びますね。」

「指導には礼儀とか躾の方が多いかな。生意気だったり、目上の人に対する態度が悪かったりすれば、その場で即指導ですよ。そういう人間性って、全部スケートに出ますからね。」

読みながらスッと心に沁みた。スケートの話だが、スケートを我々教職の世界に置き換えても成り立つ法則だ。私の経験則では、素直さ、真摯な姿勢、そして感謝の気持ちを持った子供達が各方面で成功しているように思う。そして、活躍する教え子達の姿に発奮し、自分自身を磨いて行こうとする自分がいる。

毎年8月15日に考えること

年齢を重ねるにつれ、8月15日に考えることも多く深くなってきた。平和についてである。

私の母方の祖父はフィリピン（ルソン島）で戦死しているのだが、母には祖父の思い出はなく、抱っこされたこともない。出征の時、母はまだ生まれていなかったのだ。そんなことが戦時中には当たり前のように起こっていたらしい。母は9人兄弟姉妹の末っ子で、その面倒見は姉ばかりだったそうだ。だからだろうか、母と伯母はとても仲が良い。その中で母だけが自分の父の姿を知らないのだから、特にお盆には祖父の事が話題になることがある。母はこう言う。「やっぱ会いたか…」戦争は歴史上の出来事であり、「たられば」の話は意味がないが、戦争さえなかったら…と思うことがある。

過去を悔いていても未来は変わらないので、明るい未来、平和な未来を創っていくために私達には何ができるのだろうか。担任時代に行った授業に、印象深いものがある。ある児童がこう発言した。

「隣の人と仲良くすれば、平和になる。」

この発言を基にして、多くの児童がその中味について掘り下げていった。結局は、自分の隣人と仲良くすることを、多くの人が繋いでいくことによって日本が、そして世界が平和になっていくというのだ。確かにそうだと納得のいく学習だった。不思議なことに、その後の学級の雰囲気は、誰もが周りの人達を大切人するという空気が漂い、優しい言動が増えたことを覚えている。

「世界の平和」と大命題を掲げ、人類が大変な努力を繰り広げているのだが、解決方法は意外とシンプルな方法しかないと思う。しかし、各国指導者が「自国ファースト」を掲げるものだから、そのシンプルな方法が中々世界に広がっていかないのが現状だ。やはり、教育が担うものは大きい。学校で集団活動を送る中で、友達と仲良くやっていく、人間関係をうまく調整していくということは、社会全体を平和に創造していく第一歩のような気がする。子供達には「身近な人と仲良く」してほしいものだ。

シリーズ「自分を語る」#112

「澤田先生、ご苦労様でした。で、来年度（平成22年度）の相談です。」

今度は何!?　と顔が引きつるのを感じる澤田でした。（前回はここまででした。）

「澤田先生、今年は先生のお陰で子供達も私たち職員も楽しい時間を過ごせたよ。」

「俺も楽しかったです。ありがとうございました。」

「んで、相談なんだけど、来年もその楽しい時間を過ごしてくれんどか?」

「6年担任ということですか?」

「そうそう、6年が安定すれば学校全体が大体安定するからね。どう?」

「喜んでお受けします。」（内心本当に喜んでいました。）

「ついでにもう一つお願いしたいんだけど…。」

「体育主任ですよね、引き続きお世話になります。」

「いやいや、そうじゃないんです。別のポジションをお願いできん?」

「何ですか…?」

「来年度、市教委指定の研究発表があるのは知ってるよね。で、研究主任をお願いしたいんだけど。」

この時点で、校長先生の心の中では構想は出来上がっているはずです。であれば、ごねても仕方ありませんし、校長先生は私のキャリアアップについても考えてくださっていたようです。という訳で、学級担任もピンポイントで飛び入り、校務についてもピンポイントでの起用となり、刺激的な1年を過ごすことになりました。

学級担任発表の日、子供達の微妙な表情…、今でも忘れません。厳しい先生というイメージが強く（確かにそうなのですが…）、子供達には別のイメージが刷り込まれていました。それは「ナイトハイク」です。「澤田先生のクラスになると歩かにゃんいかん。」「毎朝運動場を10周走らせられる。」という、運動が苦手な子達にとっては、絶望的な毎日がイメージされていたようです。そんなに厳しいばっかりではないんですけどね。私は子供達の自主的活動や自主的決定を尊重してきましたので、その年の子供達にも同じように投げかけました。

「ナイトハイク、キャンプ、朝のランニング、やるかやらないかは自分達で決めていいぞ。ただ、楽する方には流れるなよ。後悔することが目に見えているからな。迷った時には困難な道を選んだ方が良い。」

何のことはありませんでした。子供達の集団決定は、「ナイトハイクもキャンプも朝のランニングも全部やる!」でした。私はほくそ笑みながらこう言いました。

「しょーがねーなぁ、なら、せにゃんたい!」

予想通りの子供達の動きに満足しながら、学級は今年も安定傾向だなと感じた4月5月でしたが、問題は校務の方でした。私は研究主任の経験が殆どなく、ましてや市教委指定の研究発表なんて何をどうしたら良いやら、右も左も分かりません。兎に角、校長先生に相談しながら、指導を受けつつ進めるしかないと腹を括りました。当時の学習指導要領は「言語活動（学習内容のアウトプット）」が目玉であり、今と共通することは子供達の主体性や活発な協働活動だったと思います。（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）